6 講演者座談会

広場と門に見るキャンパス計画

○鈴木　それでは，再開したいと思います．フロアから質問をいただいているので，まずはそれぞれの先生方に答えていただきます．それからキャンパス計画室の意義などに戻って話をして，さらに残り時間を見合わせながら話し合ってゆきたいと思います．

それでは，西村先生から質問への回答をお願いします．

○西村　二問いただいています．第一の質問の趣旨は，正門前にあったスクエアがユニバーシティを体現していたと言える根拠は何か，というものです．

私がそう言った理由の一つは，スクエアを持ったキャンパスプランが海外に見られることです．オックスフォード大学やハーバード大学もそうだと思いますけれども，正門に入ったところに大きな空間があって，そこが卒業式の会場になる．このユニバーサルな広場に面して，それぞれの建物が正面を向けて建っているようになっています．

東大正門前の場合は，おそらく結果的にそうなったのかもしれないけれども，そういうユニバーサルな広場というものを，一時期，体現していたのではないか．それぞれの建物はそれぞれの学部あるいは工科大学，理科大学なのだけれども，広場があると学生同士交流できるから，ユニバーサルな場になり得る．つまり広場こそ，全体をつなぐ大事な場なのだという発想があり得たと思うのですね．ですから，そこに建物を建てることに対する反対も強かったのでしょう．

第二の質問は，本郷三丁目・根津・東大前という地下鉄の駅がキャンパス計画に与える影響についてです．

あまり影響はなさそうだとお答えしておきます．唯一言えるのは，根津駅と浅野キャンパスとが割合うまくつながっているということです．根津駅には北口と南口があるのですけれども，大体の人は北口を出て，坂道を登ってくると思います．ですが南口，つまり新御茶ノ水側の出口を出ると，浅野キャンパスのメインの入り口に近いのです．それに浅野キャンパスのメインは，実は南なのです．ところが残念なことに，その先には本郷キャンパスの入り口があるのですけれども，今はロックされています．あそこの入り口をオープンにして，浅野キャンパスのメインの入り口とつないでいけば，ちょうど二食が全体の流れの結節点になるのでよいのではないか．これについて提案していたのですけれども，時間切れで私は退職しました．後の人に実現してもらいたいと思っています．

○木下　今，門が話題になっていますが，地下鉄大江戸線ができたときに懐徳門をつくりましたね．懐徳門は，間違いなく大江戸線の駅から入る人のために新たにつくったのですけれども，同時に五つぐらい門をつくったと記憶しています．私は門の名前を考える委員会のメンバーでしたので，そのときの議論をよく憶えています．いずれも小さな門ではあったのですが，大学に新たな門をつくるのはかなり大変なことで，今まで塀だったところをただ開けただけではない．懐徳門の場合は，先ほど紹介がありましたように，懐徳館の礎石を門柱に使うというかたちで面白く解決した思い出があります．

○西村　それで一つ思い出しました．私がキャンパス計画室長のときには，西片門をつくることに反対していました．つまり，かつての門を尊重すべきであって，何か新たな門によって新たな人の流れをつくることには懐疑的でした．ですがもう既にできているのですね．実は法科大学院からすぐ出られるよう，ちょうど本郷郵便局前の信号のところに門をつくりたいという話がありましたが，とんでもないことだと言って，すぐに却下しました（笑）．

○木下　本郷三丁目から本郷通りを来ると，赤門の手前，伊藤国際学術研究センターのところに一つ門がありますね．あの門は名前がないですね．あれは絶対におかしい．

○西村　その門の名前は，意図的につけなかったのです．つまり，あそこにはもともと猿楽門という門があったのですね．ですが，猿楽門という名前を提案したら評判が悪くて，だったらむしろ門に名前をつけるのをやめようということになったのです．

○藤井　もとは学士会館[97]を抜けてその脇を通っていくと，赤門が閉まってもあそこを通って帰れるという抜け道の門があったのです．それが猿楽門でした．

懐徳門について補足があります．私は1980年代に博物館の赤澤さんに呼びつけられて，「門を開けたいのだけれども図面を描け」と言われて，図面を提出したことがあるのです．この門は，懐徳門の位置を考えていました．やはり博物館としては，赤門から奥まっていて集客力が悪いので，門をつくりたかったのですね．

その頃，博物館までぐるっと回って来ていたわけです．ある日，美術史の大先生の辻（惟雄，本学名誉教授）先生が，議長だった朝十時からの会議に遅れないよう僕の眼の前で塀を乗り越えて行ったことがありました．僕も「あ，大丈夫なんだ」と思って，それに続いて（笑）．東大の周りの塀で門がないところでは，こういうことが起きていたようです．だから，門を開けたいという欲求は理解できる．

○西村　門の通行量を調べたところ，懐徳門が大変に多いことがわかりまし

97　1951-2010年，現在伊藤国際学術研究センターがある場所には，学士会分館が存在していた（学士会ホームページ「学士会分館の歴史」
https：//www.gakushikai.or.jp/gakushikai/history/page9.html
2019年8月3日最終閲覧）．

た．本部やあの辺りの建物で働く人は，あちらが近いものだから，彼らにすごく使われていますね．

○藤井　東大病院に行く人も，みなあの門を通ります．

○鈴木　私も大江戸線で通勤しているもので，懐徳門を一番使っています．しかし，あの下の石垣自体が近世の加賀藩邸のもので，それを外して門にしてしまっています．外した石を脇に積んで置いてあるのだけれども，史跡保存という観点からは忸怩たるものがあります．ですが便利なことは便利ですね．

先ほど西村先生がおっしゃっていた，二食の裏にある閉じられている門は，高低差があるところの細い階段を上がっていったような門ですか．

○西村　はい．環境安全研究センターのところを下に行って，建物の外階段みたいなものでずっと下りてゆくと，下にごみ収集車のセンターのようなものがあります．そこのゲートが閉まっているのです．このゲートが開くと，根津から大学構内まで百メートル短くなるのです．ですからここにエスカレーターでも付ければ，かなりの通行量が見込めます．上がった先が二食の反対側ですが，二食のウイングは半分しかできておらず，残りはプレハブになっていますので，あと半分きちんと建てる．そうすると，正門からずっと安田講堂の裏を通って東西につながる道ができるのではないか．それが次の課題だ，とずっと言っていたのです．けれども大学にお金がないので，実現されませんでした．そこで世論形成をしようというのが，今回の本をつくるきっかけの一つになりました．

東大の組織の体質と総長室

○鈴木　では藤井先生に，質問へ回答していただきます．

○藤井　施設部で所蔵されている建築関係資料などへのアクセス方法について，質問をいただきました．

先ほど角田さんが，建築関係の資料は公開しつつある，と力強く言っておられましたけれども，現時点ではウェブに上がっていないものへは基本的にアクセスできないのではないでしょうか．

○西村　今回の出版にあたって施設部の資料を使えたのは，東大キャンパス計画室編ということで施設部に業務として担当されたからです．施設部に「論文を書くために史料を出せ」と言ったとしても，職員の誰かに付き合ってもらって倉庫に山積みされた資料―契約関係の資料が多く，それらは永年保存なのです―を何日もかけて調査するのは，なかなかできないように思います．施設部にも本来業務がありますから．

○藤井　東大教員であってもキャンパス計画室とかと直接関係のある人はアクセスできますが，それ以外の人は大変なのではないでしょうか．私が資料館の助手として最初にアクセスしたときは，資料館が本部直属の組織でしたので比較的容易だったでしょう．

ただし関係者がそういった資料を公開する方向で道を模索しつつ，日常的に努力しています．ですのでそう遠くないうちに，いや，遠くてもそのうちにアクセスの道筋が開くのではないでしょうか．

次の質問は，初期の本郷キャンパスにおける本部棟の所在についてです．これは『東京大学本郷キャンパス』の「キャンパスの中心―総長室と本部の変遷」(90) に答えが書いてあります．持っていない方は買っていただけると助かります（笑）．大学には正門があって本部棟があるのが普通なのですけれども，東大にはそれがなかった．この不思議な経緯を解明したくて，このテーマを論じました．

実は，本郷に移転する前の神田錦町時代には正門があって，すぐ後ろ側に本部棟のようなものがあったのです．その後，医学部が本郷に最初に来たと

きには，正門として鉄門をつくって，本部棟があったわけです．ところが，赤門側の法文がその形をとらなかった．それから工学部等が入ってくる．要するに，キャンパスができた当初，碁石の布石みたいな散在型で学部が入ってきてしまった．だから，計画概念があったのかよくわからないのです．

ですが，最初のころの本部にも総長室があったのはまず間違いない．ですが，なぜかそういう建物が建たなかったのです．それ以後も，本部棟を建てようという動きは内部で起きず，本部がいろいろなところを間借りして転々とします．もと大聖寺藩の建物を移したところを本部にしたり，明治初年にできていた外国人のための教師館に入ったりしました．最終的には，正門と大講堂（安田講堂）ができて，安田講堂の地下に本部，三階か四階に総長室をつくった．安田講堂と聞くと講堂が建設目的だったかのように思うのですが，学内における実際の建築目的は本部だったのです．実は，講堂というのはそのとき要らない施設でした．講堂では卒業式や入学式を行うというイメージがありますが，そのときは卒業式を全国的に止めていたからです．だから学内資料には，「本部・講堂」というように本部が先に書いてある．

ほかの大学でも，全員を集めて卒業式を行う大講堂をつくるのは，やめたほうがいいです．明治初期の，工部大学校などの講堂は，書庫が附属していて普段は図書館の閲覧室を兼ねているのが普通のあり方でした．それで十分ではないでしょうか．利用頻度が極めて低い施設をつくってもお金がかかるだけで意味がないので，僕はお奨めしません．

○木下　総長室がどこにあるのかわからないというのは，本当に面白い問題だと思っていて，藤井さんとよく議論をしました．一つ重要なことは，東京大学が明治10年に創立したとき総長が二人いたということです．神田和泉町にあった医学校と神田錦町にあった法文理のそれぞれに綜理がいて，それらを書類上一つの組織にしただけだからです．そして本郷キャンパスにはまず医学部が入って来て，少し遅れて法文が入って，理が入りました．それぞれのトップがどこに部屋を持ったかということも，それがいつ一つの部屋に

なっていくのかということも大きな問題です．それを追いかけていったら，医のほうはわかったけれども，文のほうはわからなかったですね．

○藤井　当時法文は，同じ建物の隅のほうで，たしか一階が法，二階が文というように上下に入っていました．東大の最初の総長は法なので，法の人の部屋が総長室になったと思います．

○木下　今回の本に現在の総長室の場所を藤井さんが書こうとしたら，書かないようにと言われたようですね．デリケートな問題であり続けていると思いました．

○藤井　それは公式には公表していないそうで，今回の本はキャンパス計画室編ですから書いてはいけないと言われました．

○西村　我々もそれは気にしていました．やはりテロがあったらまずいですから．

　むしろ私のほうから一つ伺いたいことがあります．東京大学の組織は，昔から工科大学など単科大学の力が非常に強くて，それの中の一部分として，全体のコーディネートをする総長がいました．そして今でも学部の力が強く，業務も多く，予算もたくさん持っています．一方で本部が弱いと言うと失礼かもしれませんが，大学にいる人で本部に忠誠を誓っている人は少ないですね．そういうことで総長は組織の上ではトップなのですけれども手足が乏しくて，自由にできる予算もおそらくはそれほど多くないのではないかと思います．このような東大の組織のあり方と，総長室の位置がわからないことは，関連しているのではないでしょうか．

○藤井　私もそう思います．文部省往復を重要文化財にする件で文化庁の人が何回か調査に来たとき，雑談で「今年から授業の開始時間が全学で八時半

に統一された」という話をしました．そうしたら，「ほかの大学ではそれが当たり前で，むしろ東大は今まで違っていたのか」と言われて僕たちは逆にびっくり，大笑いになりました．僕らはほかを知らないので，学部ごとに開始時刻と終了時刻が違うのが当たり前と思っていたわけですよ．他学部聴講するときには遅刻して行けばいいかとか，そのぐらいにしか思っていなかった．そして今でも，学部ごとの開始時刻はそろったのだけれども，終了時間がそろっていない．木下さんに頼まれて文学部で午後一時十分からの授業を一コマやっていたとき，僕は工学部なので「二時四十分が終わりですね」と聞いたら，「いやいや，違うよ，百分授業です」と言われましたね．まるで見せかけだけの統一になっています．

○木下　それを言ったら，福島の原発事故の後，新学期の開始が工学部と経済学部だけ一カ月ぐらい遅かった．原発情報をつかんでいるところだけが，安全を考えて遅らせたのです．何も知らない文学部は例年どおりに四月から始めました．これほど情報が一元化されていない．

○藤井　教育現場を押さえているのは学部であり，責任者は学部長なのです．学期の開始も，学部長が判断することで，総長は全面的な責任者ではありません．これは，西村さんのさっきの話のとおり，キャンパスにばらばらに校舎が建ったということと関係があるのでしょう．発想が最初から分散的なのですよ．これはほかの大学にない特徴です．

次の質問に進みましょう．懐徳館を日常的に開けてほしい，という趣旨のことがこの質問用紙に書いてありますが，これは質問というより希望ですね．

次の質問は，本郷キャンパスの塀を学術資産として如何に評価するか，というものですね．塀は大変面白いものです．取り替えたり，あるいは戦争中には金属を供出して戦後に戻したりして，近世以来の歴史が重層化しています．ですが，塀を本格的に調査していないのではないでしょうか．松田陽（本学人文社会系研究科准教授，文化資源学）さんは，ここにいらしてますか．

もし興味をもって塀の調査を本格的にしてもらえたら，キャンパス計画室としては今後の計画を立てるためにもありがたいです．みなさんにも関心を持っていただきたいと思います．

ほかにも，西野嘉章先生などの個人の史料に関するご質問がありますね．私は博物館から完全に足抜けをしていてわかりませんので，関係者に聞いてください．

本部棟とキャンパス南端の今後

○藤井　最後に建築学科OBの宇野求（東京理科大学工学部建築学科教授）さんから，「龍岡門の意匠，造形をリスペクトした丹下健三[98]先生の本部棟もまた日本建築のデザインの歴史にとって大きな意義を持っていると思います．この建築のこれからの扱い方について先生方のご意見を伺いたい」という質問を頂いています．

○西村　実は，本部棟には構造的な問題があります．最終的なプランで中央の柱を抜いたので，床がかなりたわんでいますが，これは直しようがないようです．第二本部棟のほうも，一方向が構造的に弱いのです．外部の人間として無責任に言ってしまうと，現状の建物を使い続けるのは難しいのではないか．トイレや階段が狭いというように，使い勝手も悪いという意見をユーザーから聞いています．

むしろ，あの場所は東大に残された，数少ない今後再開発できるスペースと考えたほうがいいのではないかなと思います．再開発するとすれば，大学内の南端ですから外へ開いた施設―例えば大学のインキュベーターのオフィスのような半オープンな組織―を入れるというのが，あり得る選択肢でしょう．キャンパス計画室内ではそういう議論をしていました．私は丹下先生がおられたポストにいたので，こういうことは言いにくいのですけれども．丹

98　丹下健三．1913-2005．大阪生まれの建築家．1938 年東京帝国大学工学部建築学科卒．1946 年同大学助教授となり，1974 年まで東京大学で教鞭をとった（日本大百科全書）．

下先生にはほかの名作がありますので，そちらの保存を頑張りたいと思います．

○木下　私も本部棟を施設部関連の会議でよく使っていましたので，少し内部空間がわかります．外観はなかなかよいと思うのですが，トイレを探すのが不便で，行くのも大変です．四隅なのか，柱のところに階段があって，その途中にトイレがあるのですが，あれには何度も困りました．オフィスとしての居住性については，普段使っている方に聞くしかないですが．

○藤井　本部棟の構造の話について補足します．戦後の建物と戦前の内田さんの時代の建物は，基本的に構造が全然違います．戦後の建物は経済性を優先して，構造を極力最小限にできる仕組みになっています．そのため戦後の建物はどちらかというと危なくて，構造補強も結構難しい．構造が理論化されていますから．戦前の建物は，構造補強が比較的容易です．ただ，高層でない三, 四層ぐらいだとかなり補強しやすいのですが，それを超えると難しくなるのは事実です．

今の建物の構造設計では，鉄筋コンクリートは耐久年数五十年とか言います．実際に五十年ということはないのですが，それくらい経つとかなり傷んでくる．ですが震災復興期―昭和初年から昭和10年ぐらい―の建物は百年経っても平気で，もっと保つのですね．僕らは経験的に，戦前の震災復興期の建物は安心，戦後はむしろ危ないというように思っています．

そうであっても大学の体質上，本部棟を残そうと頑張る人がいたら，残るのではないでしょうか．あるいは，大学の外からマスコミを使って残すよう攻めると結構いけるかもしれないですね．

○宇野　東大から相談を受けたことがあって，鉄筋コンクリートの床盤が長期の加重によってたわんでいることは，私も知っています．技術的な対策がないわけではありませんが（費用と時間がかかります）．安田講堂に本部を

移す事になった理由のひとつには，そうしたことがありました．また，使いにくさについては，ご指摘のとおりです．

一方，僕の質問の意図は，文化的な価値について伺うことにありました．龍岡門側から見たときに，丹下先生は景観のデザインを非常によく考えられていることがわかりますが，残念なことに景観と造形という観点で本部棟を解釈した論評がほとんど見られないのですね．機能的に問題があるというのはある時代の考え方だとは思うのですけれども，きょうのシンポジウムの流れでは，それとは別の価値を考えていたのではなかったでしょうか．文化的価値を位置づけないまま，構造的技術的問題や費用といった実務家的視点からのみ言うなら，結局のところ建物の保存や継承は難しい，再開発だという結論になるでしょう．そこは，いかがなものかなと思うわけです．

○木下　景観に関してはおっしゃるとおりですけれども，龍岡門をどう使っていくかというのはもう一つ議論されるべき問題ですね．龍岡門だけ門がなく二十四時間開けっ放しですが，あのあたりの使い方はこれまで議論されてこなかった．ここから，西村先生がおっしゃった，南側をオープンなスペースにしてゆくということにつながると思います．あと，現在，病院の手前の右側の建物に手を加えています．あそこがこれから大きく変わってくる．

○宇野　東大病院もありますし，バスターミナルもありますから，龍岡門はトラフィックの結節点で，外部環境とキャンパスをつなぐ一番のゲートになっています．そうでありながら，あのシンボリックな建物が，丹下先生の師匠である岸田日出刀先生設計の龍岡門のデザインと一緒に考えられているということについて言及がほとんどされてこなかったことが，残念な点です．ぜひ本部棟を手前側のゲートと守衛室とともに外から見て，丹下先生が，なぜああいう方向に本部棟に角度をつけて配置したのか，都市景観としてのバ

ランスをどのように考えられたかという点を，ぜひ考えていただきたいと思います．

○藤井　おっしゃるとおり，その議論はほとんどやってきていませんね．

○西村　これまで施設部内で，本部棟は構造的に難しいから保存できない，という流れの議論を聞いてきましたから，おっしゃられた観点を見過ごしていたかも知れませんね．

あと龍岡門の使い方について補足しますと，私がキャンパス設計室にいた時代に，門から入って右側の一列をどうするかという議論がされていました．加賀藩邸時代，あそこには長屋がつながっていて，東御門という非常に立派な門がありました．今は忘れられていますが，地面のところにちゃんと痕跡を残しています．実際には，すぐ外側に住宅があるので大きな手を入れられないということになり，踏み込んだ議論ができなかったのですが，そういった痕跡を評価しながら再開発しなければいけないという話をしていました．

東大と芸大，植栽の地と図

○鈴木　角田先生のご回答に進みましょう．

○角田　私が頂いた質問の内容は，工部美術学校の史料が芸大の所蔵になった経緯を含め東大と芸大の交流のエピソードについて聞きたい，というものです．

今回，私が紹介した資料は，工部美術学校もしくは工科大学の学生のデッサン習作でした．これらが東京芸大に収蔵された経緯についてお話します．まず，工部美術学校の学生の習作は，大正２年に黒田清輝が寄贈しました．ただ，黒田清輝がなぜその資料を持っていたのか，詳細はわかりません．

一方，工科大学の生徒の習作は明治30年に入っています．現在の芸大には建築科がありますが，当時の東京美術学校にはありませんでした．ですけれ

ども，建築装飾術という授業が明治の開校当初からありまして，工科大学の卒業生がその嘱託教員になっていました．具体的には，伊東忠太[99]，関野貞，塚本靖等が嘱託教員に行っています．さらに図案科，後の建築科の前身が明治29年に設置されますが，先ほど模写図を見せた大沢三之助がここに嘱託教員として勤めております．東大と芸大のこのような関係にもとづいて，習作が東京美術学校に入ったのだろうと思います．

○木下　私には質問がありませんでしたので，抜け落ちてきた問題の一つに自分で答えておきたいと思います．というのは，最初に西村先生がご紹介されていましたが，ケヤキ並木というのがあって，それから少し遅れてヒマラヤスギだとか，イチョウが植えられて並木を形成する．つまり大学における植栽の問題です．

キャンパス計画室が改変されたころから，下部組織に植栽ワーキンググループがあり，キャンパス内の植物について議論してきました．これは今，格上げされて植物部会という名前になっています．植栽の歴史性についても考えようということで，私もメンバーに迎えられました．キャンパス計画室のメンバーは建築か都市計画を専門とされている方が多く，大きな発言力を持っていると思います．そうすると，建物の配置だけが本郷キャンパス計画に見えてしまいます．ところが，現実には建物と建物の間に道があり，植物が生えている．この植栽ワーキングのほうは植物や景観の専門家が集まっているものですから，こちらから見ると完全に地と図が逆転していて，建物は植物の隙間に建っているというように捉えられています．

この両者の視点が必要，かつ重要だと思います．ですから，キャンパスの形成を考えたときに景観，とりわけ植栽が大きな問題であることを指摘しておきます．

---

99 伊東忠太．1867-1954．明治～昭和期の日本の建築家．1897年東大講師、1899年助教授，1905年教授．平安神宮や築地本願寺の設計・雲崗石窟の発見などで知られる（日本人名大辞典，東京大学百年史編集委員会編［1987：124-130］）．

図書館前広場のコンセンサス

○鈴木　私から一点，木下先生に質問したいことがあります．文学部で私が伝聞していたところでは，図書館前にかつてつくりかけられていた曼荼羅図は，文学部としてもあの絵のとおりに作りたかったが，予算不足でできなかったから，隅の二つだけタイルを張ったそうです．ですが先ほどお示しいただいた資料だと，あの広場に戦歿者慰霊の意味を込めるのは大谷先生の構想だと言われていました．曼荼羅図が慰霊の意味を持つことについて，学内の何らかの組織でコンセンサスをとった形跡があるのでしょうか．それとも―こう言うと失礼かもしれませんが―大谷先生の建築家としての個人的な思いだったのでしょうか．

○木下　私の知っている限りだと，建築家としての個人的な思いにとどまった，という感じがします．

○西村　私は大谷幸夫先生が指導教官だったので，先生の意図を聞いています．ご本人によると，ちょうど体が悪かったので徴兵猶予になったが，ほとんど同じ世代の人たちが死んでいる．そして青山の自宅も焼け出されて，戦後は東大の工学部一号館で自炊生活をしておられた．そういうわけで，自分が生き延びたのはおまけだから人のために尽くすのだ，とおっしゃっていました．ですから，大谷先生は沖縄にコンベンションセンターを設計されているのですけれども，その各所にも沖縄の人の鎮魂を意図したレリーフが配されています．そういった思いが，長い間大谷先生の底流にあったとうかがっています．

また図書館前広場の曼荼羅図について大谷先生は，お金がないのでごく一部分しかできなかったが，長い間にいろいろなことが起きてゆけばよいので，全部ここで完成しなくてもそれはそれで自分としては納得している，とおっしゃっていました．

それからもう一点，サンクンガーデンについても大谷先生のお考えを伝え

聞いています．二つ建物の間のサンクンガーデンが明かり取りになっているあたりには，大谷先生の構想がそのまま実現していたのですね．それが今回の改修で完全に失われてしまうことになったので―大谷先生はもうお亡くなりになっていますが―先生の事務所に意向を伺いに行きました．そのとき事務所の方から聞いた話によれば，大谷先生は，将来的に図書館前広場とその地下を使うことを見越して空けておいた．次の時代に改修されてもそれでよい，と生前におっしゃっていたそうです．

○木下　もう一つ，文学部に文学部三号館の壁面に言葉を刻みたいという申し入れがあったのですが，教授会で議論し，最終的に拒否したそうです．当時のことを言い伝えで知っている先生から聞いたのですが，文学部三号館の壁面は，元来サンクンガーデンに通じるようなデザインだった．そこにドイツ語文を刻みたいという．このドイツ語文は，岩波新書に入っているドイツの戦歿学徒の手記をまとめた一冊[100]から取ったものだったそうです．この本は『きけわだつみのこえ』に通じるものですが，それより早く第一次大戦後のドイツで出版され，よく読まれていました．ただ，どういう経緯で文学部がそれを受け入れなかったのかというところまでは私も追いかけていません．文学部教授会での議論は記録されていますか．

○鈴木　どうなのでしょうか．何が論点で，どんな発言があったかというのは，おそらく教授会記録には記されていないのではないでしょうか．

今回の図書館前広場改修について文学部教授会で議論になったとき，水槽とケヤキが論点になったのだけれども，戦歿者慰霊は論点にならなかったと記憶しています．でありながら，文学部会議室にあの絵（「広場の曼荼羅」図）が大事に飾られているということが，自分の中でうまく結びつかなかったので，聞いてみました．これから研究室の先輩にも聞いてみます．

100 ヴィットコップ編［1938］.

○藤井　内田祥三という人物が，今回ずっと話題になってきました．実は内田祥三は戦時下に総長を務め，学徒出陣を送り出した人なのですね．それで戦後には大変評判が悪かった．戦後，内田の後を引き継ぐのは南原繁[101]さんという，まさに平和憲法を象徴する人物です．ですので，戦中の内田と戦後の南原は，言論界で完全に悪者といい人という形になっています．大谷さんは，直接師弟関係はないけれども建築学で内田さんの系列の人ですから，思うところが大谷先生にあったのではないでしょうか．

一方で，注意していただきたいのは，本郷キャンパスが戦災に遭っていないことです．東京大空襲を受けているので，例えばドレスデンとかワルシャワのように滅茶苦茶になっていても不思議ではないのです．そうならなかった理由の一つは，米軍がここを進駐後のGHQの拠点にしようと意図していたからであることは明らかです．実際に，戦後本郷キャンパスをGHQに渡すよう交渉に来ました．それを内田祥三と南原繁たちは頑として拒否し，キャンパスを守ったという事後談もあります．

戦争をめぐっては，今から見ると面白い人の動きがいろいろとありました．さきほどの話は『東京大学本郷キャンパス』の130頁にありますのでご参照ください．

○西村　大谷先生は文学部三号館と法学部四号館の両方を設計されましたが，おそらく文学部の方々のほうが，キャンパス全体のことを考えて折り合ってくれたのではないかと思います．

というのは，文学部三号館は独立棟になっているのですね．もし法文二号館とつなげたなら内部の人が使うには便利なのだけれども，独立して建っているほうが外部のサーキュレーションがよい．一方で，法学部の人には申し訳ないですが，法学部は四号館を独立させることに反対したのです．だから，法学部三号館と四号館はつながっている．その結果，広場を行き来するのに

101　南原繁．1889-1974．政治学者．1925年東京大学教授．1945年総長(日本人名大辞典)．

デッドスペースができていて，文学部側のように自由に歩けるところが少ない．設計上，非常につらかったと思うのだけれども，学部の要求だからこうなったのでしょう．

大谷先生には，文学部三号館について文学部の先生方がいろいろなことを受け容れてくれたことに関し，感謝の気持ちがあったのではないでしょうか．

○木下　そうすると，法学部四号館も独立した建物になるのが当初のプランだったのですか．

○西村　もともと図書館前広場は東西ともにオープンスペースで，パーゴラのようなものがありました．現在，そのパーゴラは西側だけ残っていて，東側は残念ながらなくなってしまいました．当初の計画は，そのパーゴラを大きくしたような建物を東西両方に建てて，それでスクエアをつくるというものでした．今，東大のキャンパス中で建物がスクエアに正面を向けて建っているスペースは，あそこしかないのです．大谷先生は，偉大な建築に取り囲まれている中で，ひとりで踊りを踊らされているように感じておられたようで，建築家として相当な覚悟で設計に挑まれたそうです．

○藤井　今思い出しましたが，法学部三,四号館はつながっていても広場の隅を開ける，つまり一階部分は通路にする，という最終的な案があったそうです．ですが，法学部は一階を廊下にすることを断固として譲らなかったので，あのような広場計画としては最悪のパターンになってしまった．あれはキャンパス計画の汚点の一つです．

大谷先生の設計で興味深いのは，文学部三号館の建物をゴシックのアーチにして，内田先生のアーチと連続させたということです．東大の中の軸線をはっきりと強調している．このようなテクニックは，キャンパスを成熟させるために重要です．これから新しい建物をつくるときにも，有力な方法の一つだと思います．

キャンパス計画室の役割と課題

○鈴木　学部との関係，建築家の思い，といろいろな話題が入り混じってきました．終了時間も迫ってきましたので，本来の課題に立ち返りたいと思います．キャンパス計画室はどのような役割を果たし，何をするべきで，何ができなかったのか．このテーマで先生方のご意見を伺えますか．

○木下　私が口火を切りたいと思います．私がキャンパス計画室のメンバーになったときは西村先生が室長で，毎月一回メンバーが三十人以上，事務方も出席している大きな会議を開いていました．こんなに細かくチェックするのか，と驚きました．チェック対象は新築の建物だけではなくて，街灯のデザインや既存の建物の修復にまで及んでいました．そういう活動の成果が，現在のキャンパスに反映されていると思います．

一方でキャンパス計画室は，建物の内部には一切踏み込まない．キャンパス計画とはそういうものなのか，建物の中は勝手に使って，勝手に改造せよということです．昨年９月に中央食堂にかかっていた宇佐美圭司という画家の絵が廃棄されてしまったことが，今年になって明るみに出て，大きな問題になりました．このことに関して先月末にシンポジウムを催しました．このような問題が起きた原因は，あの絵は生協の所有物であったので歯止めが利かなったこと，さらにもう一つは現場が建物の内部空間であったことです．

しかしながら，中央食堂そのものについてはキャンパス計画室でチェックしていたと思いますし，当然，安田講堂は内部まできちんとやっています．では，内部にどこまで目を光らせるのが適切なのか．これについて，これまでキャンパス計画室を率いられた立場からお考えをお聞かせいただきたいと思います．

○西村　経験上，建物の内部は学部自治の世界ではないかという印象です．建物の外部は，外部空間として公共性があるので議論されましたが，内部はよほどのことがないと…．

建物に寄付者の企業名などを冠することについても，許容範囲が微妙な問題です．基本的に，建物全体は地図に載るので企業名などを冠してはならない，というスタンスでした．一方で，部屋―例えば福武ホール―は認めていました．

福武ホールで思い出しましたけれども，ここもつくるときには揉めました．実は当初，安藤忠雄（建築家，東京大学特別栄誉教授）さんが，この建物全体を地下にしたいと言っていました．完全に地下だとスペースが足りないので，計画では道路の地下まで建物が広がっていました．ところが，道路の下は共同溝が走っていて，ちょっとそれはできない．それで地上に立ち上がったのです．もう一つ，情報学環・福武ホールには塀がありますね．実はキャンパスの中に塀で閉じている建物はほかにないのです．最初の計画では，今よりももっと高い塀があったので低くしてもらいましたが，一つの敷地を区切って塀を建ててよかったのか，という議論はいまだに続いていますね．

○木下　キャンパス計画室でも企業との関係がしばしば議論されていますよね．法人化してから，この問題は顕著です．

学部の自治がいまなお強いとはいえ，全体として弱まっていると思います．つまり，企業からお金をもらって新しい活動を展開していくという，今までと違うかたちの大学運営が始まっている．具体的な形としては―この情報学環・福武ホールもそうなのですが―企業のお金で建物が新たにできる．その中で，ある企業から校舎の屋上に名前を書きたいという提案がありましたね．建物に名前をつけられないから，屋上ではどうかということです．昔なら効果なしですが，今ならば，屋上に記された企業の名前は上空から撮った映像でいくらでも見られる，大変な宣伝になるでしょう．予測できないような提案がきて，時代はどんどん変わっていると思いました．

それから，この建物も含めて新しい建物をどの場所に建てるのかという土地問題は，難しいですね．増築であれば，まだ説得しやすいのかもしれないけれども．文学部三号館の敷地も文学部の土地ということではありま

せんし．

○西村　本来土地は大学全体のものだから，みんなで使うべきという意見もあるのですが，実際には見えない線があって，それぞれの学部が管理しています．そうすると，その管理者の了解なしに手を入れられない，という難しい問題があるのは確かです．

ですが，そういうことを言っていると，敷地面積が少ない学部は高い建物を建てざるを得ない．理学部は，それほど大きな土地を持っていないものですから，安田講堂の裏に大変高いものを建ててしまった．まだ当時はキャンパス計画室が十分機能していないころだったので，その建築をとめられなかったという反省もあるわけです．

この情報学環の土地に関しても，我々は赤門と正門の間をグリーンベルトだと思っていて，いろいろな建築に反対してきました．ですが福武ホールは全部地下にするという話でしたし，寄附者の意向もありましたので，特例的に認められたのだと思います．

ただし隣の法科大学院が問題です．我々は今の場所に建てるべきではないと言い続けてきました．ですが，法科大学院ができるときに急にスペースが必要になりました．法学部は長期計画では地震研の隣のほうに移ることになっていたのですけれども，その場所に建てるのでは教育上支障をきたすということで，仮設の建物を現在の正門横に建てたのです．ですから法科大学院は，未決着の重要な問題だと思います．私は退職してしまったので，どうしようもないのですが．

○藤井　今，法科大学院が仮設と聞いて驚きました．こういうことが事前に説明されないのは仕方ないかもしれないけれども，事後にも学内にアナウンスされないのですね．私にとっても，できてみたら驚いた，という建物がかなりあります．今後のキャンパス計画では，もう少し情報がオープンになってもよいように感じています．

それからもう一つ希望を言いますと，建築家というのはどうしてもわがままなのです．基本的に自分が一番だと思っている人たちなので，暴走しかねない．個人の住宅だと，えてしてお施主さんの奥さんがうるさいのだけれども，大学は，ある意味で無責任なところがあって監視の目が緩い．そうすると，理解しがたいことが起きたりする．可能ならば，二,三人でチェックするといった仕組みが機能するとよいように感じました．

○鈴木　そのチェックする仕組みがキャンパス計画室ではないのですか．

○西村　そうなのですけれども，設計者の人選には非常に悩ましい問題があるのです．特に寄附が入っている建物で，寄附者が特定の設計者を希望すると，それになかなかノーとは言えない．寄附を受ける側が設計者の指名まで含めてOKしているところが多いですから．

可能な人選方法としては，入札制が考えられます．ですがそうすると，知恵とデザインをどうやって評価するか，という問題が起きてきます．それにもう一つ，東大だけではなく公共建築には奇妙な問題があります．公共建築の場合，一箇所の業者が入札で取り続けることに否定的で，一定規模以上の建物を一回受注したところは次回入札できないことに今でもなっています．そうすると，結果的に建物ごとの設計者が違うことになってしまう．この状況をおかしいと考えても，その改善案をどうするかという次の問題が出てきます．

ただし現実的には，東大はガイドラインが厳しくなってきていますから，特にキャンパス中心部に関してはどのような建築家が来ても好き勝手できるということはなくなっています．周辺部では，もう少し自由になりますけれども．先ほどご覧いただいたような，場所に応じたチェックの仕組みをうまく運用してゆく他ないでしょう．

○鈴木　次は藤井先生にご意見を伺いたいところですが，すでに終了時間に

なってしまいました．明確な結論に至るというよりは，貴重な情報と課題の束を突き付けられたかたちになりましたが，ここでシンポジウムを終了したいと思います．ありがとうございました．

参考文献

泉田英雄

[2016]「工学寮工学校再考―構想と実現における山尾庸三とマクヴェインの貢献」，『日本建築学会計画系論文集』81(720)，477-487.

内田祥三談，村松貞次郎聴取，中野実・藤井恵介・角田真弓校訂

[2002]「内田祥三談話速記録（二）」，『東京大学文書館紀要』20, 25-68.

ヴィットコップ編，高橋健二訳

[1938]『ドイツ戦歿学生の手紙』，岩波書店，東京.

大谷幸夫

[1988]「さまざまな応答」，『新建築』63(1)，253-259.

小川一真

[1900]『東京帝国大学』，小川写真製版所，東京.

学士会

[1907]『学士会月報』230.

旧工部大学校史料編纂会編

[1931]『旧工部大学校史料』，虎之門会，東京.

コンドル博士記念表彰会編
[1931]『コンドル博士遺作集』，コンドル博士記念表彰会，東京.

角田真弓
[2019]『明治期建築学史』，中央公論美術出版，東京.

東京大学
[1997]『東京大学創立百二十周年記念東京大学展　学問の過去・現在・未来[第一部]「学問のアルケオロジー」』，東京大学出版会，東京.

東京大学キャンパス計画室編
[2018]『東京大学本郷キャンパス―140年の歴史をたどる』，東京大学出版会，東京.

東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編
[1988]『東京大学本郷キャンパスの百年』，東京大学総合研究資料館，東京.

東京大学百年史編集委員会編
[1984]『東京大学百年史　通史一』，東京大学，東京.
[1985]『東京大学百年史　通史二』，東京大学，東京.
[1986]『東京大学百年史　通史三』，東京大学，東京.
[1987]『東京大学百年史　部局史三』，東京大学，東京.

東京帝国大学附属図書館
[1930]『東京帝国大学附属図書館復興記念帖』，ヘラルド社，東京.

堀勇良
[2003]『外国人建築家の系譜』，日本の美術447，至文堂，東京.